

平安京右京三条二坊十一町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇六―二四

平安京右京三条二坊十一町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条二坊十一町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび自転車等駐車場整備計画に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

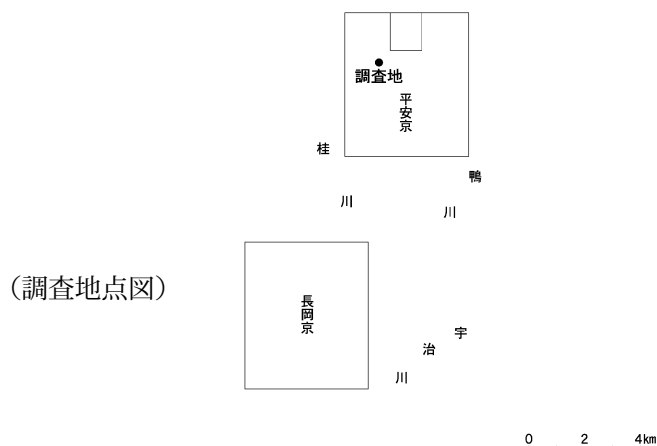
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

1 遺 跡 名	平安京右京三条二坊十一町跡、西ノ京遺跡
2 調査所在地	京都市中京区西ノ京下合町地内
3 委 託 者	京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
4 調査期間	2006年10月11日～2006年12月15日
5 調査面積	229 m ²
6 調査担当者	モンペティ恭代
7 使用地図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」「山ノ内」を参考にし、作成した。
8 使用測地系	世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
9 使用標高	T.P.：東京湾平均海面高度
10 使用基準点	京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
11 使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
12 遺構番号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
13 遺物番号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
14 掲載写真	村井伸也・幸明綾子が担当したが、一部について調査担当者が撮影した。
15 遺物復元	村上 勉・出水みゆき
16 基準点測量	宮原健吾
17 本書作成	モンペティ恭代
18 編集・調整	児玉光世



目 次

1. 調査経過	1
2. 周辺の調査	4
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 第1面の遺構	5
(3) 第2面の遺構	10
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	12
(3) 瓦類	15
(4) 石製品	16
5. ま と め	16

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（北から）
		2	溝50（北から）
		3	溝50土器出土状況（北東から）
図版2	遺構	1	第2面全景（北から）
		2	建物1（北東から）
		3	建物1柱穴58（北から）
図版3	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	周辺の調査位置図（1：5,000）	2
図3	調査区配置図（1：400）	4

図4	調査前全景（北西から）	4
図5	作業風景（南西から）	4
図6	第1面遺構平面図（1：100）	6
図7	第2面遺構平面図（1：100）	7
図8	東壁断面図（1：50）	8
図9	南壁断面図（1：50）	9
図10	溝50セクション断面図（1：50）	10
図11	建物1柱穴断面図（1：50）	10
図12	古墳時代須恵器拓影・実測図（1：2）	11
図13	第2層平安時代遺物包含層出土土器実測図（1：4）	12
図14	溝50出土土器実測図（1：4）	13
図15	小溝群出土土器実測図（1：4）	14
図16	第1層室町時代遺物包含層出土土器実測図（1：4）	15
図17	出土瓦拓影・実測図（1：4）	15
図18	石鏃実測図（1：1）	16

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	2
表2	遺構概要表	5
表3	遺物概要表	11

平安京右京三条二坊十一町跡

1. 調査経過

本調査は京都市西大路駅自転車等駐車場（仮称）整備計画に伴う発掘調査である。調査地は平安京右京三条二坊十一町にあたる。これまでは駐車場として利用されていたが、市営地下鉄開通に伴い駐輪場建設が計画されたため、京都市文化市民局文化財保護課により試掘調査が行われた。その結果、平安時代の遺構が良好に残存していることが明らかになったため、発掘調査を実施することとなり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を担当した。調査地点は京都市中京区西ノ京下合町に所在し、西大路御池交差点から南へ約 60 m 下がり東へ約 20 m 入った南側に位置する。

調査は 2006 年 10 月 11 日から調査に伴う付帯工事を開始した。排土置き場などを考慮して、東西 12.5 m、南北 18.3 m の長方形の調査区を設定した。調査面積は 229 m²である。まず、機械掘削によりアスファルト、盛土、近世の洪水層とみられる砂礫層まで掘り下げを行い、排土は 4 t トラックにて順次積み出しを行った。10 月 31 日から人力掘削に転換した。状況に応じて写真撮影や実測作業を行いながら調査を進め、鎌倉時代の耕作溝、平安時代の溝・建物跡などを検出した。12 月 5 日に最終面の全景写真撮影を行い、平面実測図作成した。最後に、下層確認のため一部に断割りを入れ、土層断面図を作成し、12 月 15 日にすべての現場作業を終了した。なお、人力掘削で出た排土は場外処理し、アスファルト再生砕石を用いて現地表下約 1 m まで埋め戻した。

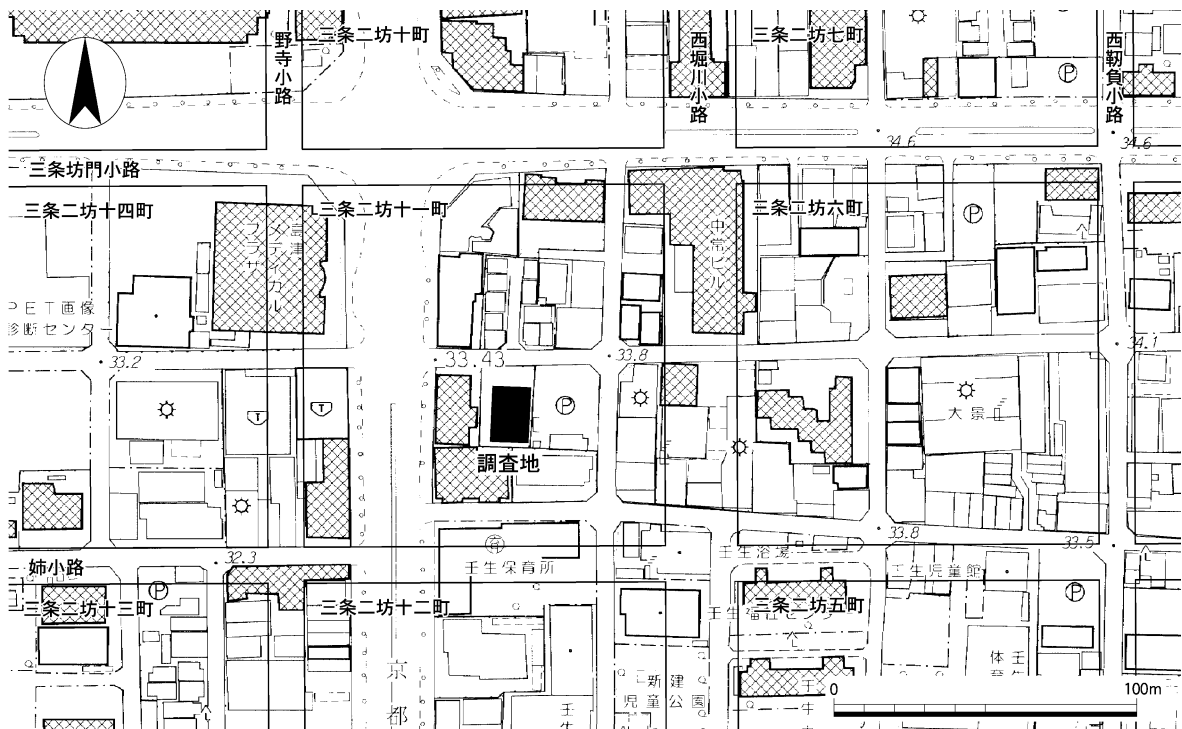


図1 調査位置図 (1 : 2,500)

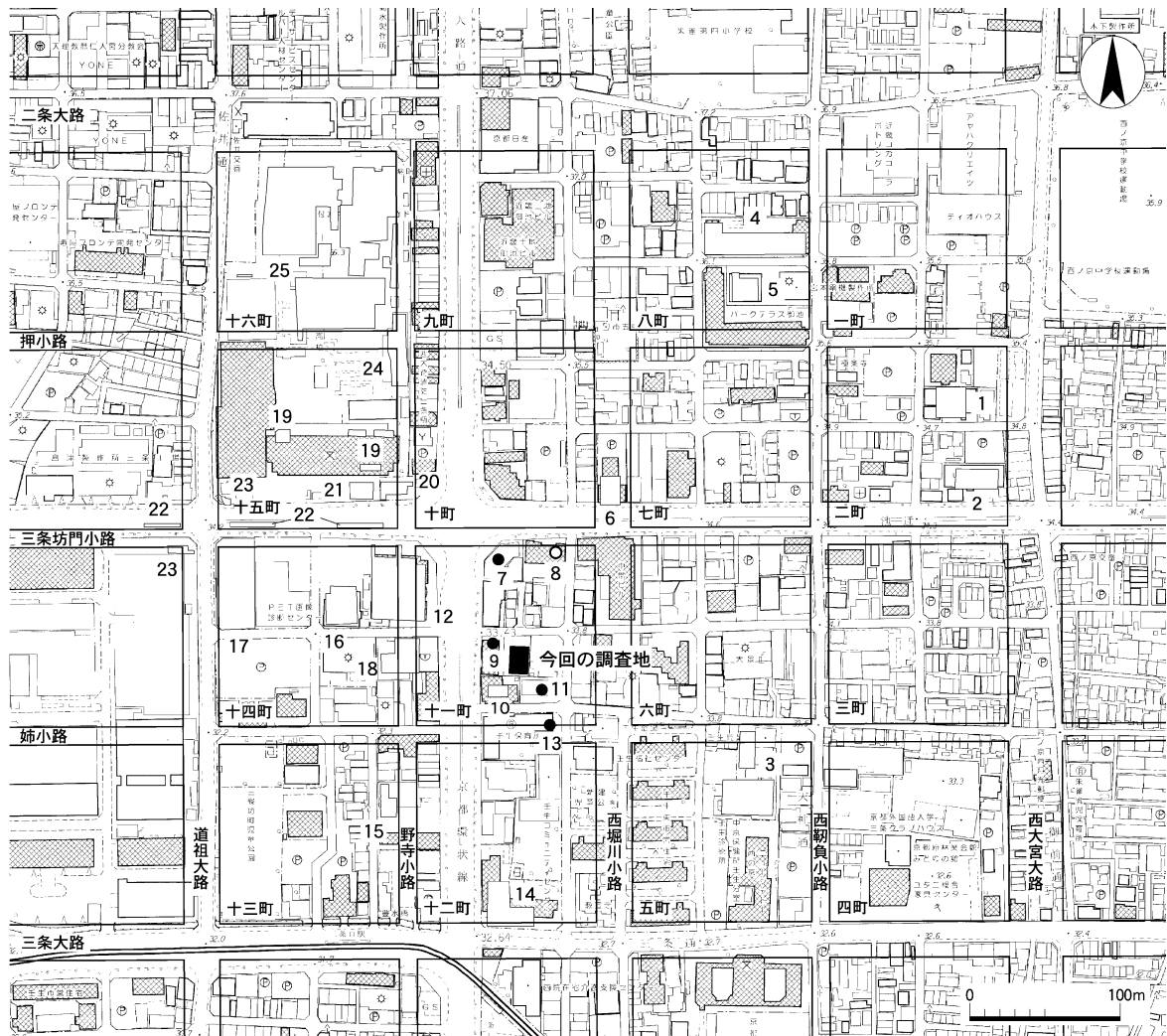


図2 周辺の調査位置図(1:5,000) ※調査地点の数字は表1のNo.と対応
○は試掘調査、●は立会調査

表1 周辺の調査一覧表

No.	調査地区	所在地 (中京区西ノ京)	調査期間	調査概要	備考
1	二町	銅駝町68	2003.8.1～ 2003.9.10	平安時代の建物1棟、泉、溝、土 壙、ピットなどを検出。	近藤知子「平安京右京三条二坊二町」『京都市 内遺跡発掘調査概報 平成15年度』京都市文 化市民局 2004年
2	二町	銅駝町76	1981.10.21～ 1981.11.20	平安時代の建物3棟、井戸1基、 溝2条、柵1条などを検出。	平尾政幸「平安京右京三条二坊」『平安京跡発 掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
3	五町	北小路町4他	1985.4.15～ 1986.8.14	姉小路南側溝、平安時代の建物7 棟、柵4条、井戸1基、溝5条を 検出。	平尾政幸、他「平安京右京三条二坊」『昭和60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市 埋蔵文化財研究所 1988年
4	八町	原町97	1986.12.8～ 1987.3.23	平安時代の建物1棟、井戸2基、 溝1条、園池の一部、川などを検 出。	堀内明博、他「平安京右京三条二坊」『昭和61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市 埋蔵文化財研究所 1989年
5	八町	原町99	1990.3.15～ 1990.5.11	4の調査に連続する園池の一部、 柱穴などを検出。	辻 裕司「平安京右京三条二坊1」『平成元年 度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵 文化財研究所 1994年
6	西堀川小路	原町64	1982.6.17～ 1982.7.10	西堀川小路の堀川・路面2面・西 側溝などを検出。	平尾政幸、他「右京三条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文 化財研究所 1984年

No.	調査地区	所在地 (中京区西ノ京)	調査期間	調査概要	備 考
7	十一町	下合町27・28	2001.10.25	-0.64mで時期不明の包含層。 -0.75m以下、黄褐色粘土の地山。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
8	十一町	下合町29-1	1994.4.14	-0.2mで氾濫堆積層、-0.9mで平安時代の溝状遺構、柱穴などを検出。	梶川敏夫、馬瀬智光「平安京右京三条二坊十一町跡No.32」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
9	十一町	下合町37	1986.2.3～ 1986.2.7	-0.2m以下、時期不明の土壌、包含層を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
10	十一町	下合町41	1993.11.15～ 1993.12.10	-0.4mで中世以降の遺物を含む氾濫堆積層、その下層で平安時代の井戸、土壌、溝、柱穴などを検出。	報告書などは未刊。『平安京右京三条二坊十一町跡発掘調査終了報告書』より 古代文化調査会 1994年
11	十一町	下合町40	2002.10.2～ 2002.10.7	-1.27mで時期不明の湿地状堆積を検出。	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
12	十一町・十四町、野寺小路	下合町11	1989.11.30～ 1990.2.23	三条坊門小路南側溝、野寺小路東西両側溝、柵2条、野寺小路川を検出。	木下保明「平安京右京三条二坊2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
13	十二町	新建町1	2000.6.1～ 2006.6.8	平安時代中期以前の姉小路路面、中期の姉小路北側溝、中期以降の湿地状堆積を検出。	吉本健吾「平安京右京三条二坊十二町00HR58」『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
14	十二町	新建町5-14～30	1978.11.10～ 1978.12.28	建物3棟、平安時代前期の井戸1基、平安時代以前?の溝などを検出。	平尾政幸「平安京右京三条二坊」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集 1978』 1979年
15	十三町	三条坊町14-1他	2005.2.22～ 2005.3.8	鎌倉時代から室町時代の土取跡、柱穴、江戸時代の耕作跡などを検出。	山口 真『平安京右京三条二坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-19 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年
16	十四町	下合町11	2002.10.2～ 2002.11.9	平安時代前期の建物3棟と、区画施設などの柵または塀などを検出。宅地割りは1/8町が想定される。	報告書などは未刊。『平安京右京三条二坊十四町発掘調査終了報告書』より (財)古代学協会 2002年
17	十四町	下合町地内	1998.3.19～ 1998.6.26	三条坊門小路南側溝、平安時代の建物8棟、門2棟、柵8条、井戸3基と道祖大路川などを検出。	南 孝雄「平安京右京三条二坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
18	十四町、野寺小路	下合町20・21・22	2006.2.10～ 2006.4.1	平安時代中期～室町時代初め頃の野寺小路に重なる川跡、水利施設などを検出。	布川豊治『平安京右京三条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-1 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
19	十五町	東中合町1市立西京商業高等学校	2001.1.29～ 2001.3.14	平安時代の池、土壌、柵などを検出。	網 伸也、他『平安京右京三条二坊十五・十六町-「齋宮」の邸宅跡-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 2002年
20	十五町、野寺小路	東中合町	2003.11.4～ 2003.12.26	平安時代の建物、溝、柵、野寺小路川などを検出。	津々池惣一『平安京右京三条二坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
21	十五町	東中合町1市立西京商業高等学校	1987.5.18～ 1987.6.12	平安時代の溝4条、柱穴などを検出。他に中世の井戸がある。	本 弥八郎「平安京右京三条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
22	十五町	東中合町	2001.10.22～ 2001.11.29	平安時代前期の土壌、井戸、柱穴を検出。他に室町時代の溝がある。	百瀬正恒、他『平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
23	十五町	東中合町	2005.8.8～ 2005.9.2	平安時代の南北溝、川跡、側溝など検出。	卜田健司『平安京右京三条二坊十五町・三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年
24	十五町・十六町、野寺小路	東中合町1市立西京商業高等学校	1981.7.3～ 1981.7.31	平安時代中期の押小路両側溝、建物1棟、井戸1基、平安時代後期の野寺小路川などを検出。	辻 純一「右京三条二坊(2)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
25	十六町	東中合町1市立西京商業高等学校	1999.7.21～ 2000.8.30	平安時代の建物群と庭園・泉など、1町規模の邸宅を検出。	鈴木廣司、他『平安京右京三条二坊十五・十六町-「齋宮」の邸宅跡-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 2002年

2. 周辺の調査

当地は平安京の条坊では右京三条二坊十一町にあたり、北を三条坊門小路、西を野寺小路、南を姉小路、東を西堀川小路に囲まれた町で、調査地はそのほぼ中央部、東二行北五・六門に位置する。また、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を検出した西ノ京遺跡の南東部に位置している。

本調査地に直接的に関係する古代から中世の文献史料はないが、近世の古絵図¹⁾では西京村に属する耕作地として図示されている。

調査地周辺では数多くの発掘調査・試掘調査・立会調査（図2、表1）が実施されており、調査成果が報告されている。まず、本調査地の南西隣接地は古代文化調査会によって調査（10）されており、平安時代の井戸・土壇・溝・柱穴を検出している。また当研究所が行った御池通西大路北西に所在する京都市立西京高等学校校内の調査（19・25）では、平安時代前期から中期にか

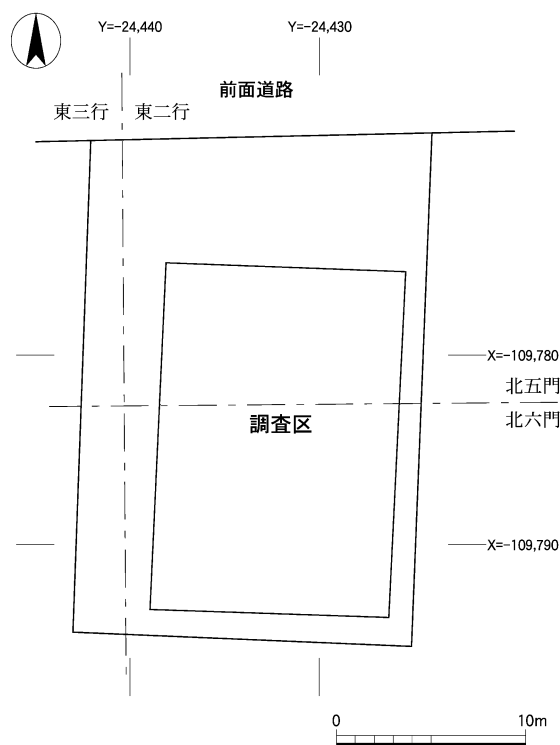


図3 調査区配置図（1：400）

けての庭園を有する1町規模の「齋宮」邸宅跡を検出した。他にも、御池通西大路南西での調査（12）で、三条坊門小路南側溝、野寺小路東西両側溝、柵列2条、川跡を検出、その南側での調査（18）でも、平安時代中期から室町時代初め頃の野寺小路に重なる川跡、水利施設などを検出した。西大路御池交差点東入一筋目の交差点北東部の土地での発掘調査（6）では西堀川小路の堀川・路面・西側溝などを検出、その南西角の土地での試掘調査（8）では、平安時代の溝状遺構・柱穴などを検出した。これら既調査の成果から、本調査地においても平安時代の宅地に関連する遺構の存在が予想された。



図4 調査前全景（北西から）



図5 作業風景（南西から）

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8・9)

基本層序を上から示すと、現代の盛土層が約0.4 m、近代の耕作土層が約0.2 m、砂礫および細砂層が0.4～0.7 m、以下、室町時代の遺物包含層である褐灰色砂泥層(第1層)、平安時代の遺物包含層である暗褐色砂泥層(第2層)、明黄褐色粘質土の地山(第3層)と堆積する。地山上面の標高は、32.8 m前後であり、その地形は北部が高く、南方向にゆるやかに下がり、その高低差は0.3 m程である。

砂礫および細砂層は2～3層に分層でき、河川の洪水層と考えられる。第1層の褐灰色砂泥層は、ほぼ全面に0.1～0.2 mの厚さで堆積している。上面の標高は33.2 m前後である。出土遺物から室町時代後期に堆積したものと考える。第2層の暗褐色砂泥層は0.1～0.2 mの厚さで堆積している。この層は後述する溝50より東側に堆積する。溝50より西側では、この層に対応する層として黒褐色砂泥層が堆積する。両層とも9世紀中頃～10世紀中頃までの遺物を含むことから、10世紀半ば(平安時代中期)の整地層と考えられる。

今回の調査では、第2層平安時代遺物包含層(10世紀半ばの整地層)の上面を第1面として、第3層地山の上面を第2面として調査を進めた。

調査区の一部では、近代の大規模土壌・溝状遺構などにより、地山まで深く攪乱されていたが、その他の場所では鎌倉時代の溝、小溝群、平安時代の溝、柱穴群、建物などを検出した。

以下に、これらの遺構の概略を報告する。

(2) 第1面の遺構 (図6、図版1)

第1面で検出した遺構は、鎌倉時代の溝・小溝群、平安時代の溝・柱穴群である。

溝21 調査区西端で、南北溝の東肩を検出した。東西幅0.4 m以上、南北は調査区外に延びる。深さ0.15～0.2 mである。この溝の埋土である黒褐色砂泥層には平安時代前期の遺物の小片が多いが、鎌倉時代の遺物を含むことから、鎌倉時代に形成されたと考えられる。

小溝群 小溝を東西方向18条、南北方向11条を検出した。周辺の調査例でよくみられる耕作に関連する溝と考えられる。規模は幅0.3～0.5 m、深さ0.2～0.4 mである。溝内の埋土は暗褐色から黒褐色の砂泥層で色調や土質などが検出面(第2層平安時代遺物包含層)とほとんど変わ

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
室町時代	遺物包含層(第1層)	
鎌倉時代	溝21、小溝群	小溝60他南北溝11条、小溝62他東西溝18条
平安時代	溝50、遺物包含層(第2層)、柱穴群、建物1	建物1は柱穴58・59で構成



Y=-24,436

Y=-24,432

Y=-24,428

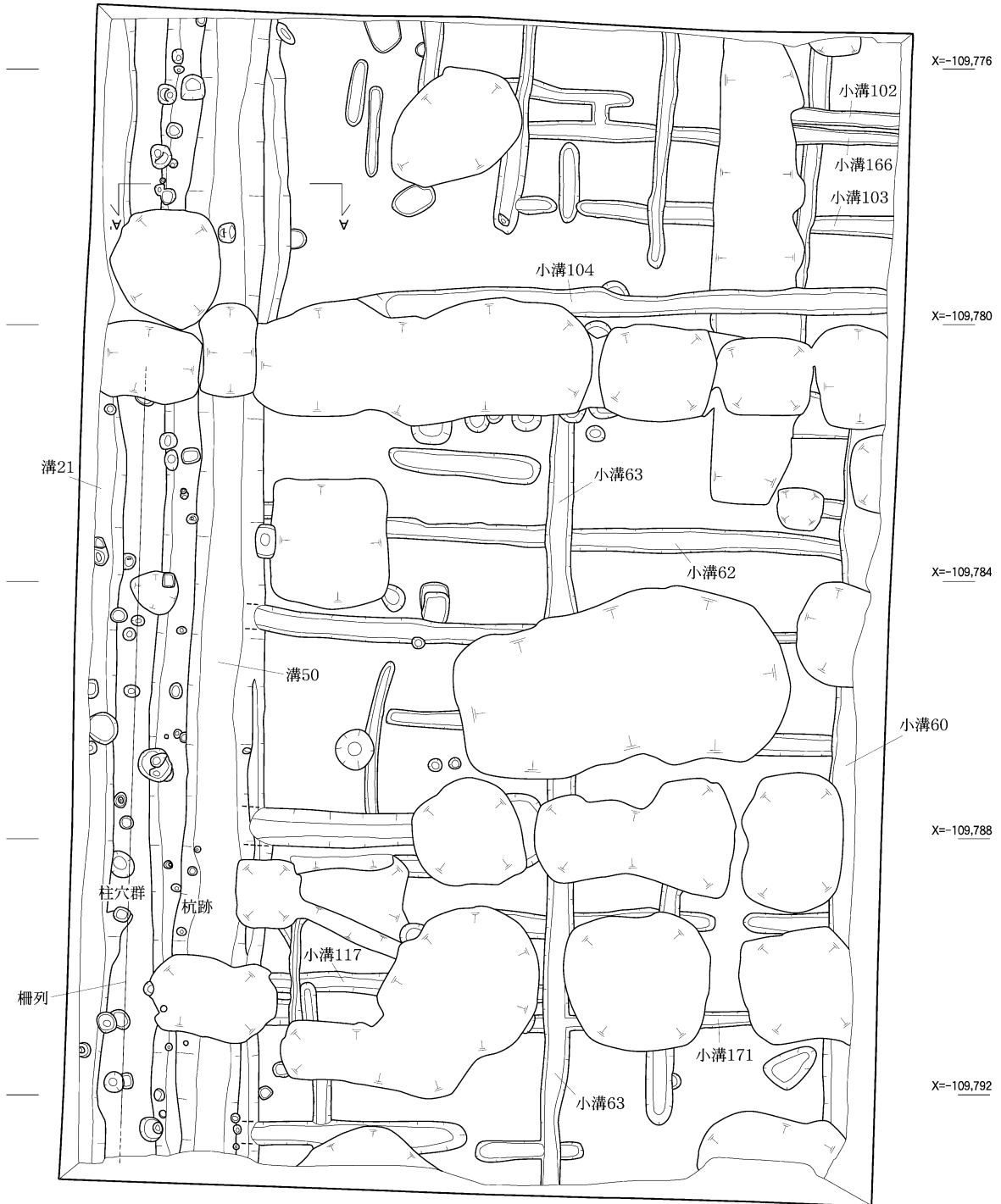


图6 第1面遺構平面图 (1:100)



Y=-24,436

Y=-24,432

Y=-24,428

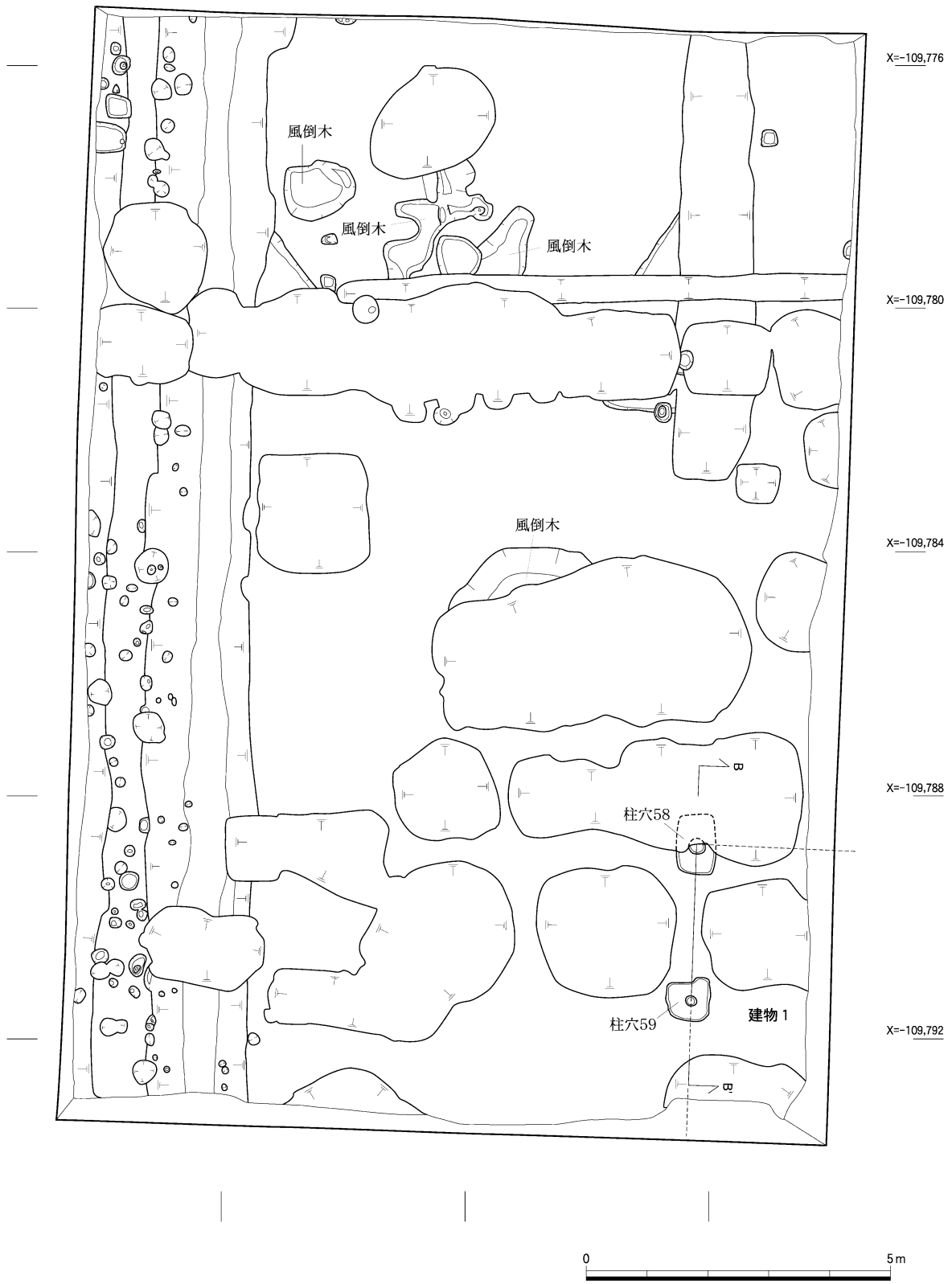


図7 第2面遺構平面図(1:100)

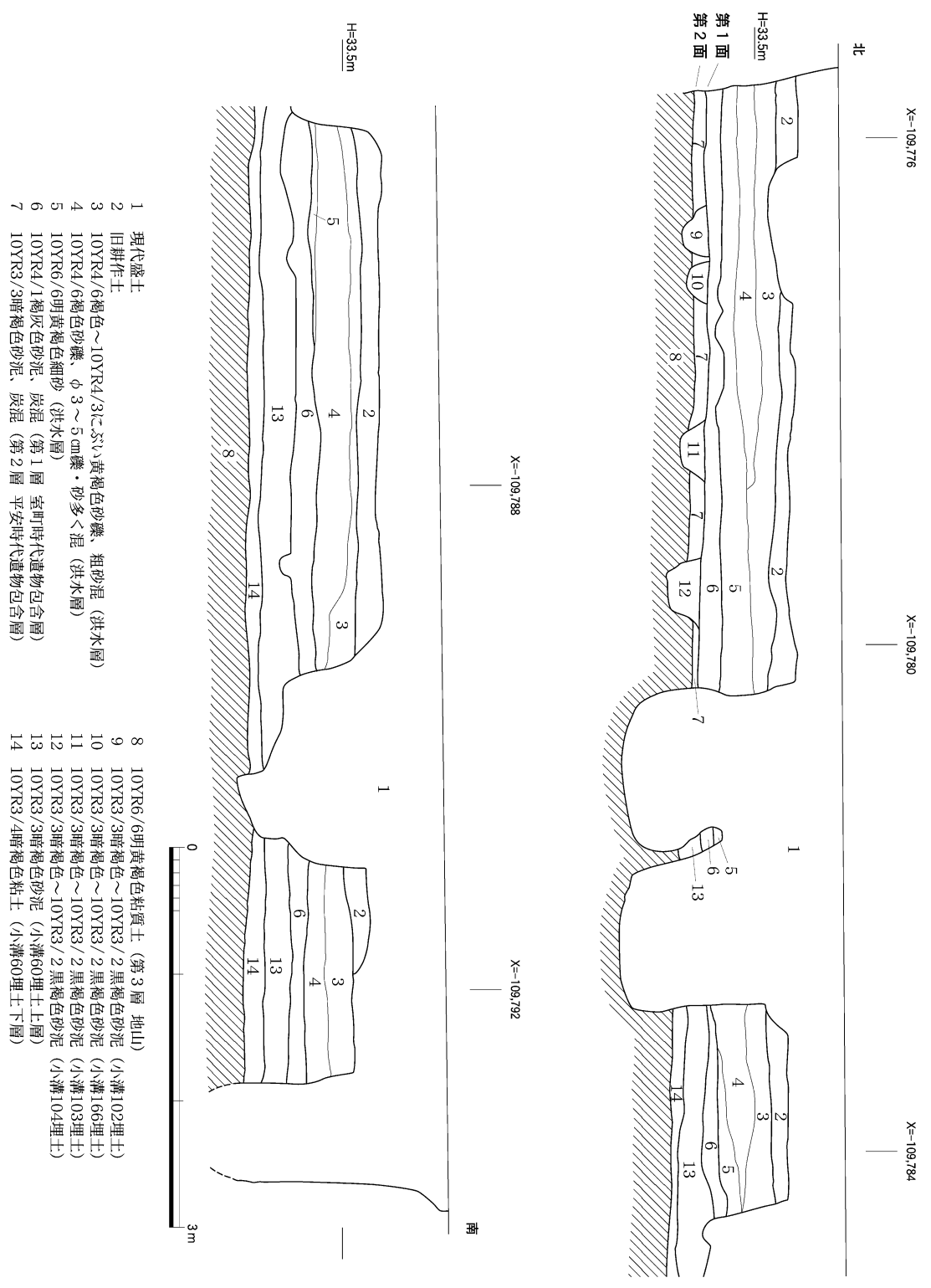


図8 東壁断面図 (1:50)

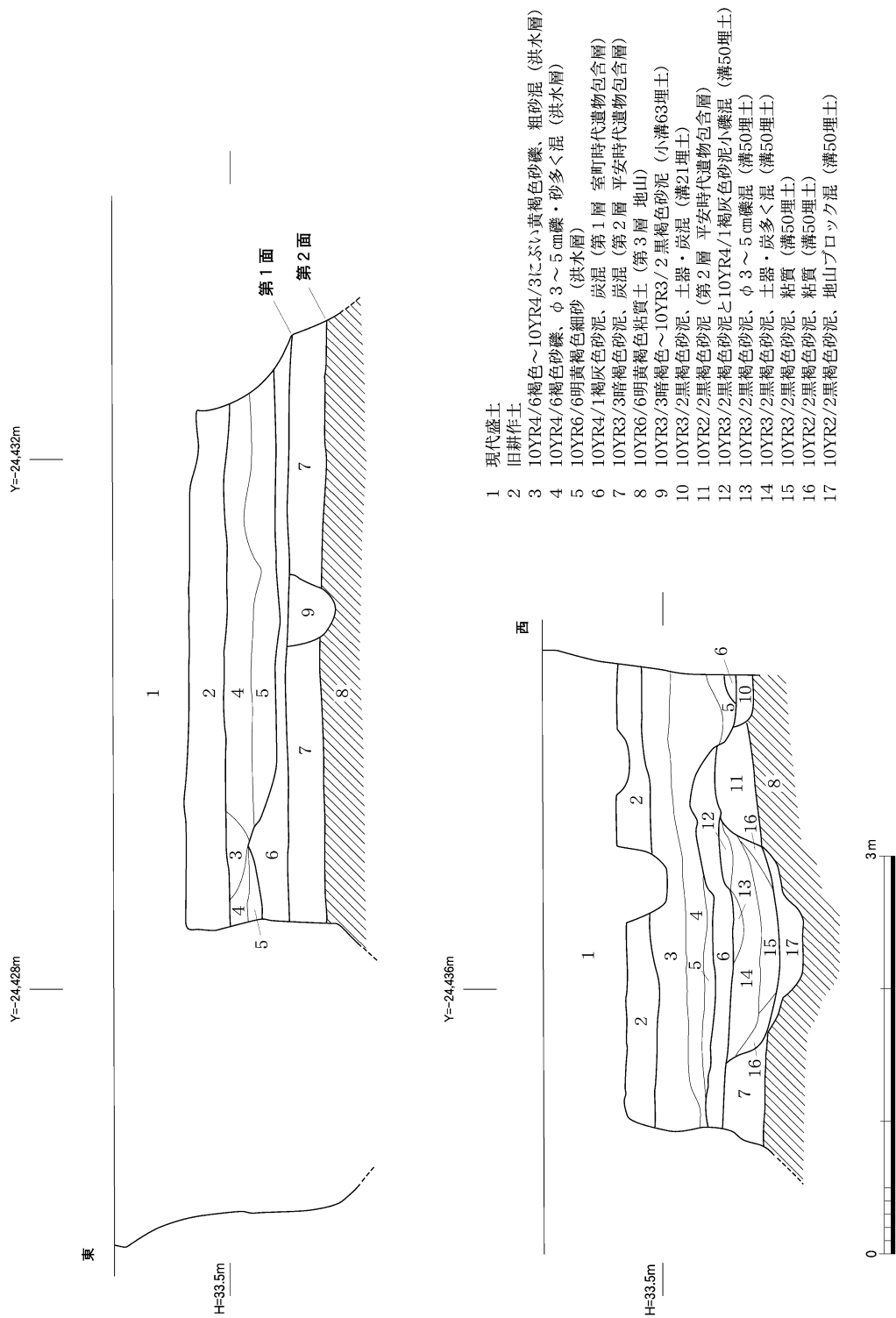
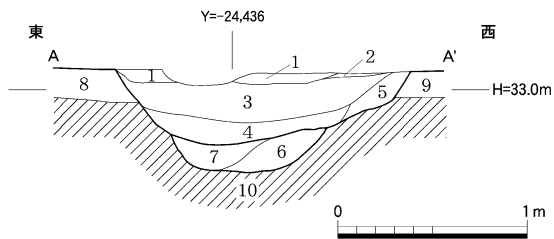


図9 南壁断面図 (1 : 50)



- 1 10YR3/2黒褐色砂泥、φ 3～6 cm礫混
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥に10YR4/1褐灰色砂礫混
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥
- 4 10YR2/2黒褐色砂泥、地山ブロック混
- 5 7.5YR3/1黒褐色砂泥
- 6 10YR2/1黒色粘質土
- 7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
- 8 10YR3/3暗褐色砂泥、炭混（第2層 平安時代遺物包含層）
- 9 10YR2/2黒褐色砂泥（第2層 平安時代遺物包含層）
- 10 10YR6/6明黄褐色粘質土（第3層 地山）

図10 溝50セクション断面図（1：50）

溝50（図10）調査区西側で南北溝を検出した。幅はほぼ一定で約1.8m、検出面からの深さは約0.6mである。溝底の標高は北で32.5m、南で32.4mである。溝内肩部で径0.1m前後の小穴を約30箇所検出した。護岸のための杭の痕跡とみられる。溝の断面形は2段に落ちる逆台形状となっており、堆積は大きく2層に分かれる。埋土は上層は黒褐色砂泥層、下層は黒色粘質土と暗オリーブ褐色泥砂である。出土した遺物は、ほとんどが9世紀後半から10世紀後半の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などであるが、9世紀前半の土師器、須恵器も出土している。10世紀半ばの整地層を切っていることから、整地後のかなり近い時期に成立し、10世紀後半に埋没したものと考えられる。この溝の中心線は十一町内の東二行と三行の宅地境界推定線より東約3.5mに位置することから、平安京条坊区画に関連する溝の可能性がある。なお、北五・六門の境界に関する遺構は検出しなかった。

柱穴群 溝50の西側で径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mの柱穴を30基以上検出した。南北方向に並ぶことから、溝50西岸に造られた南北の柵列とみられる。

（3）第2面の遺構（図7、図版2）

第2層を除去し、地山である明黄褐色粘質土層の上面を第2面として遺構検出を行った。この面では掘立柱建物跡を検出した。またこの面には、地山層が盛り上がった箇所があり、その周辺に半円形または不定形で埋土が褐色、底部の層位が乱れている土壌がいくつかあった。風倒木の痕跡とみられるが、時期に関しては不明である。

建物1（図11） 調査区南東部で掘形が隅丸方形の柱穴2基（柱穴58・59）を検出した。調査

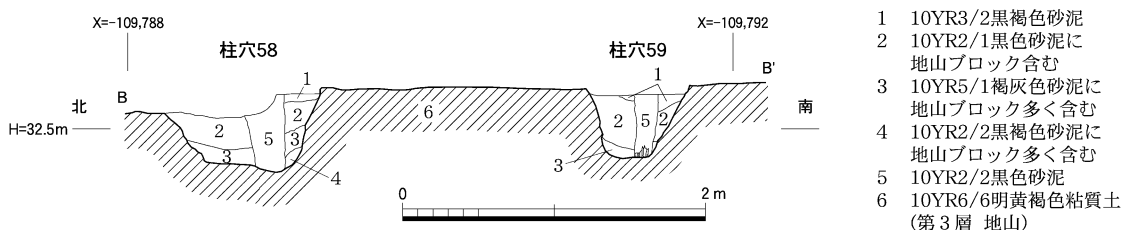


図11 建物1柱穴断面図（1：50）

- 1 10YR3/2黒褐色砂泥
- 2 10YR2/1黒色砂泥に地山ブロック含む
- 3 10YR5/1褐灰色砂泥に地山ブロック多く含む
- 4 10YR2/2黒褐色砂泥に地山ブロック多く含む
- 5 10YR2/2黒色砂泥
- 6 10YR6/6明黄褐色粘質土（第3層 地山）

区南東に延びる建物を想定することができ、建物1とした。柱間の距離は2.5 mである。掘形の規模は柱穴58は南北0.7 m以上、東西0.9 m、深さ0.64 m、柱穴59は、南北0.7 m、東西0.7 m、深さ0.52 mである。柱穴59の柱あたり底部から木片が出土し、樹種を同定したところヒノキであった。整地層より古いこと、柱穴の規模が大きく、柱間が広いことから平安時代前期の掘立柱建物と考えた。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に33箱出土した。出土遺物には、土器類、瓦類、石製品などの種類がある。土器類が大半を占め、他は少量である。平安時代前期から中期のものが最も多く、他には鎌倉時代から室町時代、それに近代の遺物がある。特徴としては、磨滅した小片が多いこと、緑釉陶器、灰釉陶器が比較的多いことが挙げられる。また、中国からの輸入磁器（青磁、白磁）も認められる。以下、主要な遺物について概説する。なお、平安時代以降の土師器編年については小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土師器の編年的研究」³⁾に従う。

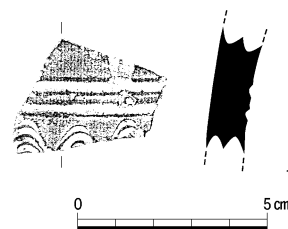


図12 古墳時代須恵器拓影・実測図(1:2)

(2) 土器類

古墳時代の土器(図12)

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代以前	石器	少量	石器1点	0箱	0箱
古墳時代	須恵器	少量	須恵器1点	0箱	0箱
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦	27箱	土師器9点、須恵器3点、黒色土器1点、緑釉陶器13点、灰釉陶器7点、瓦4点	1箱	23箱
鎌倉時代	土師器、須恵器、輸入陶磁器	1箱	土師器1点	少量	1箱
室町時代	土師器	1箱	土師器2点	少量	1箱
近代	施釉陶器、染付磁器、陶製印鑑	5箱		少量	5箱
合計		34箱	42点(3箱)	1箱	30箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

古墳時代後期の須恵器の小片（1）が出土した。甕の口縁部で外面に2条の凹線と櫛描波状文を持つ。第1層室町時代遺物包含層から出土した。

第2層平安時代遺物包含層出土土器（図13、図版3）

第2層から出土した土器には土師器（2～6）、須恵器（7）、緑釉陶器（8～11）、灰釉陶器（12～15）がある。（2）は皿で口縁部は外反し端部を上方につまみあげる。胎土は浅黄橙色を呈する。（3）は杯で器壁が薄く、体部は斜め上方にのびる。口縁は外反して端部を上方につまみあげる。胎土は灰白色を呈する。（4～6）は高杯脚部である。（4）は高さ7.4cmと小型の高杯の脚部である。脚部の断面は八角形を呈し中空部は下方に向かってやや広がる。外面はケズリが施される。（5）は円筒状で一部にケズリが入る。中空部は下方に向かってやや広がる。（6）は断面八角形を呈し中空部は下方に向かって広がる。外面は丁寧なケズリを施す。胎土は橙色を呈する。（7）は杯蓋である。中央部を欠く。内面は磨滅しており墨が付着、硯に転用されたとみえる。（8）は壺蓋である。中央部を欠く。口縁部は天井部より外下方に折れ曲がる。端部は丸くおさめる。胎土は灰黄色でやや軟質、釉は淡い黄緑色で全面に施す。（9・10）は削り出し平高台を持つ椀である。（9）は底部外面はナデ調整、内面はミガキを施す。底部内面に陰刻花文を施す。胎土は灰白色で硬質、淡緑灰色の釉を全面に施す。（10）は焼成不良で軟質、釉薬は剥離している。器壁が荒れているため調整は不明である。（11）は断面方形の高台を貼り付ける椀である。底部外面に一箇所トチン痕がある。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。体部上半部にミガキを施す。胎土は灰色で硬質、浅黄色の釉を全面に施す。（9・10）は山城産、（11）は猿投産である。（12）は壺蓋である。中央部を欠く。口縁部は天井部より内傾気味に折れ曲がる。端部は丸くおさめる。釉が外面に施される。（13）は三日月状の高台を貼り付ける皿である。内面に釉を施す。高台内部に墨書様のものが見えるが文字として判読はできなかった。（14）は断面台形状の高台を貼り付ける皿である。体部下位にはケズリを施す。内面に釉を施す。（15）は壺の底

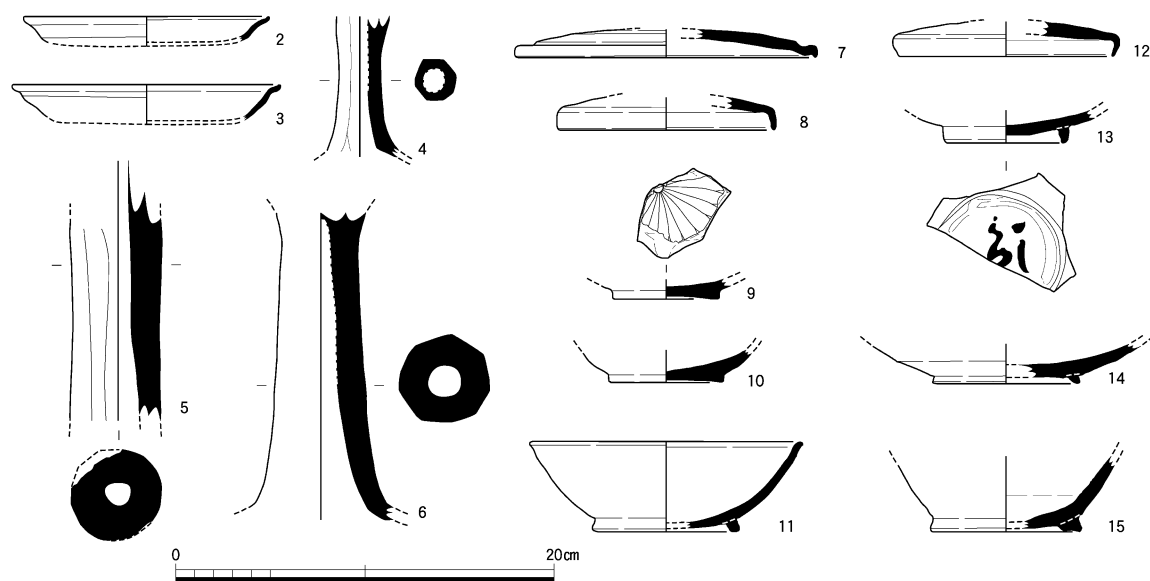


図13 第2層平安時代遺物包含層出土土器実測図（1：4）

部である。貼り付け高台は、窪む端面を持ち、外端接地となる。体部はやや直線的に立ち上がるが中段以上は欠損。体部内面にはロクロ目が残る。体部外面はケズリ。釉は高台内部以外に施釉、底部内面にも釉が落ちる。(12～15)は東海産である。以上の土器類の時期は9世紀中頃～10世紀中頃に属する。

溝 50 出土土器 (図 14、図版 3)

溝 50 埋土から出土した土器には土師器 (16～19)、緑釉陶器 (20～26)、灰釉陶器 (27～29)、黒色土器 (30)、須恵器 (31・32) がある。(16・17)は皿で、器壁が薄く、口縁端部は外反する。口縁部上端面はつまみ上げる。底部外面はオサエ、内面はナデ。口縁部内外面上位はヨコナデ。(18)は小型の土師器壺で従来から壺 B と分類される。墨描人面土器に用いられる土器で最終期の型式である。底部を欠く。体部はやや丸く頸部がしまっ肩が張り、口縁部が外反する。口縁端部は丸みをもってつまみ上げる。口縁内外面はヨコナデ、体部内面はナデを施し平滑にする。粘土を巻き上げて成形しており、体部外面には粘土紐の継ぎ目が少し残る。墨描はなかった。(19)は片口付き鉢である。底部に高台、口縁には片口が付く。口縁は屈曲して外反し、端部は小さく肥圧し丸くおさめる。この口縁端部は甕と類似している。胎土は明赤褐色で体部外面には丁寧なヘラミガキを施す。内面は丁寧なナデを施す。(20)は断面方形の高台を削り出す椀である。体部外面はケズリ、内面はミガキを丁寧に施す。一部で焼成が甘く、褐灰色の胎土が橙色になる。釉は高台内部にはかかっていないが輪を描いたような痕跡がある。(21)は削り出し平高台を持つ椀である。体部は丸みをもって立ち上がるが口縁部は欠損している。内面底部にミガキを施す。全面に施釉する。胎土は灰色で硬質、釉は明緑色である。(22)は断面三角形で内傾し窪む端面を持つ高台を貼り付ける椀である。体部外面下位はケズリ、内面はナデ調整。底部内面には凹線を巡らす。胎土はにぶい黄橙色で釉は暗緑黄色。釉は高台内部以外に施す。(23)は断面三角形の高台を貼り付ける椀である。底部には糸切り痕を残す。胎土は黄橙色で軟質、釉は暗緑色である。残

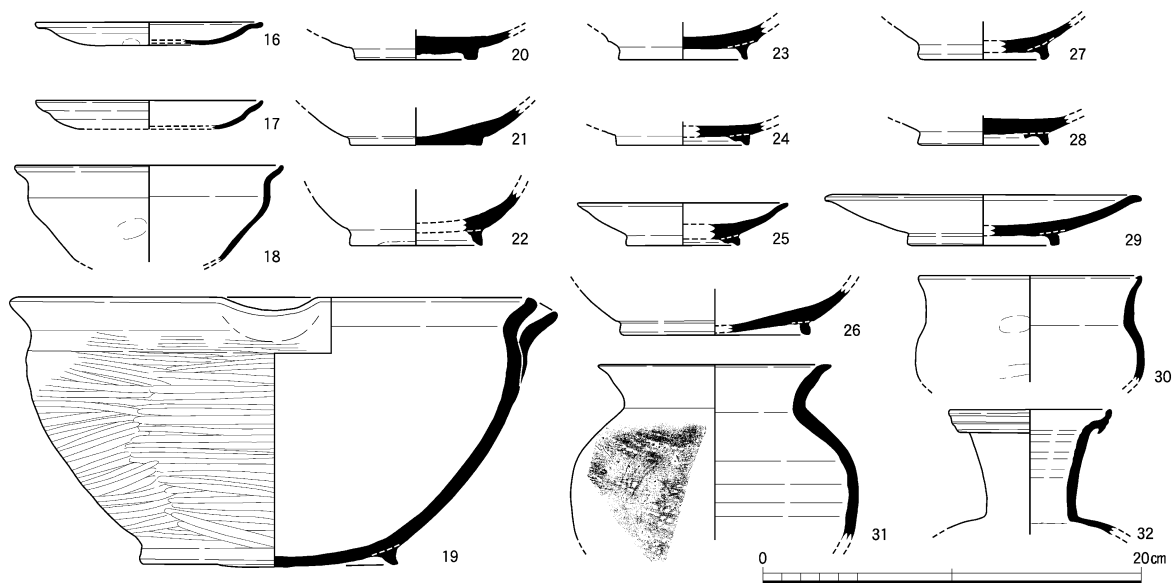


図 14 溝 50 出土土器実測図 (1 : 4)

胎部には全部釉がかかる。(24)は明瞭に窪む端面を持つ高台を貼り付ける。体部が欠損しているため皿か椀か特定しがたい。胎土は黄橙色でやや軟質である。暗緑色の釉薬は高台内部以外に施される。(25)は窪む端面を持つ幅広の高台を貼り付ける皿である。体部は浅く開き口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部と口縁部との境は外面でにぶい稜をつくる。硬質で暗緑色の釉薬が底部内面まで施されるが、体部には所々剥離する箇所がある。(26)は断面方形の高台を貼り付ける椀である。体部は丸みをもって立ち上がるが口縁部は欠損している。全面に釉を施す。胎土は灰白色で硬質、釉は浅黄色である。(20・21)は山城産、(22～25)は近江か美濃産、(26)は猿投産である。(27)は三日月状の低い高台を貼り付ける椀である。底部の糸切り痕は未調整。底部内面には重ね焼きの痕跡を残す。底部内面は非常に平滑に磨かれている。(28)は体部上部は欠損しているが平坦な底部がさらに広がるように見え、皿と思われる。窪む端面を持つ幅広の高台を貼り付ける。窪みは明瞭で端面が段状を呈する。内面には全面に釉が施されるが外面にはない。(29)は断面方形の高台を貼り付ける皿である。体部は浅く、口縁部は外上方へ開き、端部は丸くおさめる。底部には内外面ともに釉は施されない。以上の3点は猿投産である。(30)は甕の口縁部である。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は内へわずかに突出する。上端面は平坦気味に面をなす。体部外面はケズリ、内面は板状工具で調整している。外面には煤が付着する。(31)は甕で、体部内面には回転ナデ、外面には板タキ痕がある。口縁部内外面はナデ調整である。(32)は壺の頸部である。口縁端部は上方に立ち上がり、上端・下端ともに突出し帯状をなす。内外面に回転ナデ。篠窯産である。以上の土器の時期は(18・19)は9世紀前半、(21・26・29・31)は9世紀半ば、(20・28)は9世紀後半、(16・17・22・23・27・32)は10世紀前半、(24・25)は10世紀後半に属する。

小溝群出土土器 (図 15)

小溝群からは、小片で磨滅した9世紀後半から10世紀前半の遺物に混じって、鎌倉時代の遺物があつた。

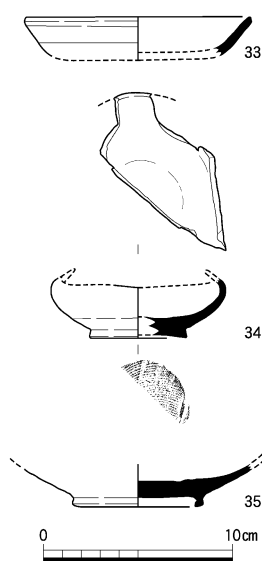


図 15 小溝群出土土器
実測図 (1 : 4)

(33)は鎌倉時代後半の土師器皿、(34・35)は9世紀後半の緑釉陶器である。(33)は体部は外上方へやや反り気味に立ち上がり、口縁端部外面に幅の狭い端面を持つ。(34)は耳皿である。削り出し平高台を持つ。底部外面は糸切り痕を残す。口縁に相對する二方を内方へ折り曲げ端部を波打たせたものと思われる。胎土は灰色で硬質、釉は黄緑灰色である。全面に釉を施す。山城産である。(35)は断面長方形の高台を削り出す椀である。体部はやや直線的に立ち上がる。口縁部は欠損している。外面は下位から高台側までケズリを施す。胎土は灰色で硬質、全面に施された釉はオリーブ灰色を呈する。山城産である。(33・34)は小溝 117 出土、(35)は小溝 60 出土である。小片のため図示できなかったが、口縁部 1 段ヨコナデで端部の断面が三角形状になる鎌倉時代前期の土師器が溝 21 から出土している。

第 1 層室町時代遺物包含層出土土器 (図 16)

出土した遺物は小片が多かったが、平安時代から鎌倉時代、室町時代後期のものまであった。(36)は土師器皿で底部は平坦で体部は丸みをもって立ち上がる。口縁端部外面に幅の狭い端面を持つ。底部外面はオサエ、他の部分はナデ調整する。鎌倉時代後半のものである。(37)は開きの大きい土師器皿である。口縁部下半でやや外反気味となり、上半部は上方へ立ち上がる。口縁部と体部外面上段はナデ調整する。下段は欠損。室町時代後期のものである。

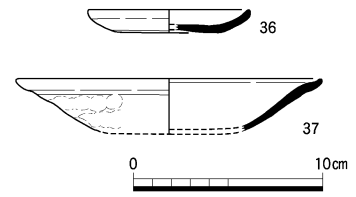


図 16 第 1 層室町時代遺物包含層出土土器実測図 (1 : 4)

(3) 瓦類 (図 17、図版 3)

瓦類は各遺構から平安時代前期とみられる小片が出土している。丸瓦・平瓦で図示できる破片は各 1 点であった。軒平瓦は出土しなかった。(38)は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は欠損して不明である。蓮弁は盛り上がり、圏線が巡る。外区に珠文が巡る。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて粘土を付加して接合する。やや軟質で淡黄褐色を呈する。洛北産のもの⁴⁾とみられる。(39)は瓦当範が磨耗しており文様はあまり鮮明ではないが、中房には草書体の『官』の銘を配する単弁十六葉蓮華文軒丸瓦であることがわかる。周縁部を欠く。内区の文様は十六葉の単弁蓮華文で蓮弁は互いに接する。裏面はナデ調整。胎土には小石を含み、やや軟質、暗灰色を呈する。同範の瓦が西賀茂瓦窯から出土している⁵⁾。丸瓦 (40) は端部に玉縁が付いていたとみられる。凹面に布

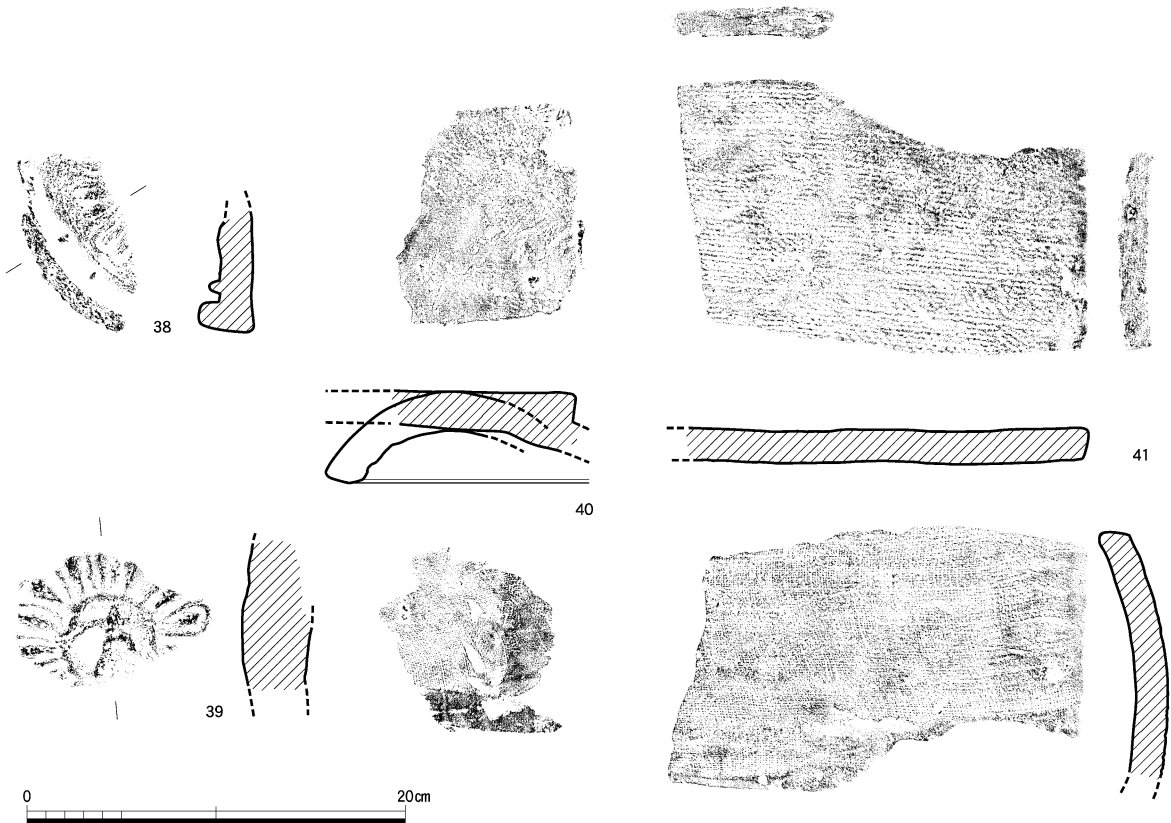
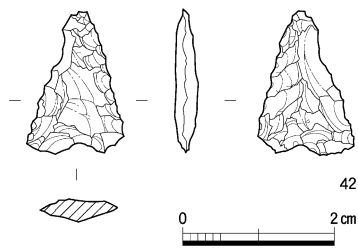


図 17 出土瓦拓影・実測図 (1 : 4)



※アミ目は欠損部分を示す

図 18 石鏃実測図 (1 : 1)

目、凸面には丁寧なナデを施す。側面はヨコケズリである。やや軟質で暗灰色を呈する。平瓦 (41) は凹面布目で部分的にナデを施す。凸面はタテ縄タタキ、側面はタテナデで面取りをする。胎土には白色の砂を含み、硬質、灰色を呈する。(38) は第 1 層室町時代遺物包含層から、(39・41) は溝 50 から、(40) は第 2 層平安時代遺物包含層からの出土である。

(4) 石製品 (図 18、図版 3)

第 2 層平安時代遺物包含層から石鏃 (42) が 1 点出土した。長さ 1.9 cm、幅 1.3 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 0.7 g、暗青灰色のサヌカイト製である。基部の一部が欠損しているが、丁寧に加工されている。

5. まとめ

今回の調査では、右京三条二坊十一町中央から南東部 (北五・六門、東二・三行) にかけての平安時代の土地利用とそれ以降の耕作地化について調査成果があった。以下では、それらを中心に調査地の変遷をまとめる。

平安時代以前

調査地では平安時代以前の遺構は検出できなかったが、サヌカイト製の石鏃や櫛描波状文を有する古墳時代の須恵器甕の口縁部が出土しており、当地が西ノ京遺跡の一端であることを示している。

平安時代

調査地の南西隣接地で 1996 年に実施された発掘調査⁶⁾では平安時代前期の井戸を検出しており、当地周辺は宅地としての土地利用があったことが示されている。今回第 2 面で検出した平安時代前期とみられる建物 1 は調査区外の南東に広がると想定でき、この建物は少なくとも東二行、北六門に位置することになる。第 2 層暗褐色砂泥層と黒褐色砂泥層は 10 世紀半ばの整地層と考えられる。溝 50 は整地の直後か、かなり近いうちに成立し、10 世紀後半には埋まったと考えられる。また溝 50 を隔てて西と東では整地層の色調・土質が異なっており、西側には柵列とみられるピット群がみられる。この溝を境に異なった性格の土地利用がなされていたと推測できる。北五・六門の境界に関する遺構はなかったが、溝 50 は東二・三行の区画に関連する可能性は高い。平安時代後期に関しては出土遺物が極めて少量で、遺構も確認することはできなかった。

鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代に形成されたと考えられる小溝群および溝 21 を検出した。周辺の調査にも同様の小溝が検出されており、これらは耕作に関連する溝と考えられている。本調査地も鎌倉時代には耕作地化されたと考えられる。調査区のほぼ全面に堆積する第 1 層褐灰色砂泥層は室町時代後期の旧耕作土層とみられ、この時期も耕作が行われていたと推測できる。

中世から近代

第1層より上に堆積する砂礫層は、周辺の調査でも氾濫原⁷⁾や湿地状堆積⁸⁾として報告されている層である。時期の特定はできなかったが、室町後期以降に川の氾濫の影響を受けていることがわかる。現代盛土直下の旧耕作土層は、近代までの古絵図で一帯が耕作地として描かれていることと一致する。

註

- 1) 『慶長 昭和 京都地図集成』 柏書房 1994年
- 2) 『平安京右京三条二坊十一町跡発掘調査終了報告書』 古代文化調査会 1994年
- 3) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 4) 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 掲載番号42に類似する。
- 5) 註4 掲載番号235
『平安京古瓦図録』平安博物館 1977年 掲載番号55
『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告 第4輯 (財)古代学協会 1978年
- 6) 註2に同じ
- 7) 註2に同じ
梶川敏夫・馬瀬智光「平安京右京三条二坊十一町跡 No.32」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化観光局 1995年
- 8) 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょうにぼうじゅういっちょうあと							
書名	平安京右京三条二坊十一町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-24							
編集者名	モンペティ恭代							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょうさんじょう 平安京右京三条 にぼうじゅういっちょうあと、 二坊十一町跡、 にしのきょういせき 西ノ京遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのきょうしもあいちょう 西ノ京下合町 ちない 地内	26100	461	35度 01分 09秒	135度 43分 56秒	2006年10月 11日～2006 年12月15日	229㎡	自転車等 駐車場整 備計画
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西ノ京遺跡	散布地	古墳時代		須恵器		平安時代前期の掘立柱建物の一部と平安時代中期の宅地を区画したとみられる溝、鎌倉時代の耕作溝などを検出した。		
平安京右京三条二坊十一町跡	都城跡	平安時代	溝、遺物包含層、建物跡	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦				
		鎌倉時代	小溝群	土師器				
		室町時代	遺物包含層	土師器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-24
平安京右京三条二坊十一町跡

発行日 2007年3月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961